

# ミヘルス『政党の社会学』の世界 ——権力と権力者

氏 家 伸 一

## はじめに

ミヘルスは、『政党の社会学』イタリア語版への序文（1912）の中で、自著（独語版，1911）への書評を紹介している。中でも，第三部（「大衆指導が指導層に及ぼす心理的反作用」）と第四部（「指導者層の社会的分析」）が，独創性を認められたと自賛しつつ紹介している<sup>(1)</sup>。ここには，ミヘルス社会学の方法が反映している。『政党の社会学』の有名なことば，「社会主義者は勝利できるかもしれない，しかし，社会主義は勝利できない」<sup>(2)</sup>（S. 377.）から分かるように，ミヘルスは思想や原理それ自体というよりも，その担い手の人間に強い関心を寄せているということである。

本稿は，この彼の分析の特徴がよくでている，第二部，第三部，そして第四部を中心に『政党の社会学』の世界を考察する。ミヘルスの著者の中心テーマは政党組織を通した民主主義の可能性といえる。ところで，そのミヘルスの民主主義理解が甚だ曖昧であることはしばしば指摘されるところである<sup>(3)</sup>。民主主義と対立する概念のオリガーキーの**はずが**，「民主的オリガーキー」という概念も現れてくるので読者は戸惑うばかりである。いずれにしても，彼の民主主義観念の底流には，ルソー流の直接民主主義が，その実現不可能性の認識とともに存在する。

ともあれ、思想と原理としての民主主義をミヘルスは支持する。ただその実現可能性には甚だ懐疑的で、彼の实見した民主主義の実態（政党のみならず国政での）についても不十分と判定する。この姿勢は、民主主義に関するあらゆる問題について一貫している。この二元論をどう克服するか。これが難問であり、今日でも妥当するアポリアをなす。ただ、ミヘルスの組織（とりわけ、政党）内民主主義の究明は、民主主義一般の問題として、普遍化して考えることができるし、民主主義の再考に重要な手掛かりを提供しよう。

エビングハウゼンは、1960年代の研究で、オストロゴルスキーとミヘルスの政党研究の先駆けについて、二人の研究は、「政党国家」への発展とともに極まってきた議会制と民主主義の危機のもとに生まれた。20世紀初頭の「民主主義の進展の不十分な現実に対する不満」が二人を政党社会学へといざな<sup>(4)</sup>った、と書いている。

ミヘルスの本書を中心とする中期の思想は、リアリズムと否定的側面の暴露による悲観主義が目立つが、それは解釈の一面でしかない。階級闘争における階級意識論の弁証法、グラムシを予見させる知識人論、そしてロシア革命の行く末をうらなう先見と予見など注目すべき見解や警告も興味をひく。それに、本書の中心テーマともいえる、民主主義の自己否定という主張は極めて現代的といえよう。

## 1. 「指導」・代表と「支配」

ミヘルスはアメリカ・デモクラシーにも注目し、本書でも考察の対象としている。たとえば第二部（「指導者層の実際の支配者としての特徴」）ではアメリカの共和制が、民主主義の基準をなすものとして、積極的に紹介される。ミヘルスはゾンバルトに依拠しながら、選挙によって決められる地位と、頻繁な選挙にてらして、「アメリカ市民はもっとも広範囲でもっとも際立った民主主義を享受している」と語っている。しかもそれに、「大きな民主的政党」でも同様とつけ加えている。(S. 92.) た

だ、二点留保すべきことがある。

第一、フェデラリスト・ペーパーズ（第十章）における、代表制の積極的称揚の論理（独立したエリートこそ、全体の利害を体現する）が全く触れられていないこと。

第二に、ミヘルスの場合、この民主的な選挙によって選ばれたリーダーの独立性と長い在任期間（地位の安定性）こそが、オリガーキーへと繋がることになる。

「独立性」は、ミヘルスの場合、反民主主義へと導くこととなる。従って、逆に、「選挙が頻繁に行われることが、オリガーキーの毒気に対する、民主主義の基礎的な安全弁なのだ。」依然として、ルソー的である。（英議会制の批判を想起<sup>(5)</sup>）長い在任期間はオリガーキーにつながるとの批判は、まさに、SPD（ドイツ社会民主党）にあてはまる。

ルソーにならって、ミヘルスも「短期の任期による民主主義」を評価しつつも、それは、職務の習熟や責任感の点で、組織の業務遂行では「不適切」とする。民主主義の基本である、「主権的大衆」に依拠する限り、組織は「安定性」を欠き、臨機応変の行動にも不適合となることは、今日でも、しばしば指摘されることではある。

リーダーをコントロールする「強制委任」の方法に対しても、民主的と評価されようが、上の欠陥は免れない。そして、ミヘルスによれば、リーダーの地位の安定が、技術的に効率的としても、民主主義に反する傾向を有することは、間違いない。それによると、「人民投票的なボナパルティズム」（これについては後述）が、「世襲的君主制」へと転換することは、大いに可能だから、という。(S. 101.)

技術的必要性と民主主義の相克に加えて、党財政における経済権力の発生もオリガーキー形成の重要な要因とされる。この問題分析は決しておろそかにできるものではないし、ミヘルス社会学の注目すべき功績と言っても過言ではない。とりわけ SPD では決定的な問題をなす。

ミヘルスはあるところで、フランスのミルランに象徴される、社会主

義者のブルジョワ化と「裏切り」を痛烈に揶揄し、非難している。その無節操ぶりを徹底的にこきおろしている。(S. 101-6) 革命的サンディカリズムの名残が1911年時点ではまだ消えていないといえよう。ドイツの社会主義者にはそのような事例はみられないとミヘルスは云う。リーダーと大衆の間に「理想の共同体」が存在し、相互の信頼関係は強い。理由は簡単である。要するに、権力との接触を一切閉じられ、労働者の世界は、いわば国家内国家の観を呈し、一つの独立した世界をなしているからである。ウェーバーの言葉を使えば、「社会主義ゲッター」と化しているからである。従って、リーダー層の高潔さも、「誰も近寄らない娘の道徳心に」<sup>(6)</sup>似ていると、ミヘルス得意の比喩的表現で示される。SPDのおかれた独特の地位状況のゆえに、党組織の財政問題が浮上する。

ミヘルスが党組織の特徴を教会組織のモデルに準えることはしばしば見られることである。出世の梯子テーゼは有名である。経済力対「理想主義」の相克は、青年ミヘルスの思想の通層低音をなす問題意識であった。党のリーダーと職員への財政的給付はどの程度が適切か。政治を無給の名誉職とするのは、中世貴族制での官職任命では普通のことであった。そこでは、職務と地位とが「名誉」とみられた。近代になっても同様の事態と観念がのこっていた。よって、たとえばイタリアでは、労働者が代議士になるのは困難となる。フランス、オランダ、そしてイタリアでは党の重職が、「金持ち」によって構成されるということになる。

近代の政党と労組は大きな「経済的権力」を手に入れることになった。それは、教会がその組織拡大とともに、聖職者層と教会職員が、教会団体から次第に独立し始めたと同様の運命をたどることになる。経済権力によって、政党と労組は一つの「私的企業」と化す。そして組織に雇用された幹部と職員は——いくら低く抑えられてはいても——、経済的に組織それ自体の存在に依存することになる。党の保守化に作用する経済的依存は青年ミヘルスの有名なテーゼであった。党の経済的分析は、政

党社会学へのミヘルス社会学の一大貢献といえよう。

ところで、政党内の経済的条件による小ブル化と保守化の主張はミヘルスより前に、彼と同じ SPD 左派に属したパルヴスが行っていた。

パルヴス（1867-1924）はドイツの労働運動は党 SPD の指導下で発展してきたとする。そして当の SPD 理解には、ドイツのこの 1 世紀の歴史の理解が不可欠とする、もっともな見地から本論文を書いたとする。党内の小ブルジョアをテーマとするところでパルヴスは、当時、党内で気に入らないことがあると、＜小ブル＞をけなすのが慣行となっていた。しかし、小ブル批判はもっともとしても、それが、「一般的状況の付随現象である」ことを考慮に入れねばならぬ、とする。というのも、小ブル的政治は、必ずしも小ブル層によってのみ行われているわけではないからである。逆で、小ブル的政治が、「小ブル分子」をうむのだ。ともかく、「小ブル」は決まり文句と化していることは由々しいことである、と。

「党内の小ブル」は、社会主義者鎮圧法後に、ユンゲンたちが、繰り返したりあげたし、フランクフルトの党大会では、バーベルも問題視した。それに関して、パルヴスはミヘルスと同様の見解を彼に先んじて指摘していた。つまり、そこで、パルヴスは、概念の混同を明らかにして、「人は再び、二つの事物をごちゃまぜにしている。すなわち、党運動それ自身によって初めて生みだされた小ブル的分子と、党へと押し寄せてきた、小ブルの人民分子と、である。二つは別々に取り扱わねばならない」と語っていた。

前者についてこう説明する。党の発展とともに、アジテーターらが何百人も必要となる。こういう、現代風にいえば専従の活動家は、政治的に「新しい階級」を形成する、とパルヴスは云う。彼らは、党の出版事業に集中しているし、おもに労組から人員が供給される。かれらは、「プロレタリアート公務員」とよばれる。「彼らの物質的運命は、党と密接に繋がれている。<sup>(7)</sup>」

さらに、パルヴスよりも我が国では有名なローザ・ルクセンブルク(1871-1919)も労働運動の同様の現象(組織の自己目的化、民主主義の退行)について告発していた。労組における幹部会の独立化と一般組合員との疎隔、組織の自己目的化、政策の保守化をミヘルスと全く同じように、1906年の論文で喝破していた。<sup>(8)</sup>といっても、彼女は決してペシミストにはならなかった。階級意識のあるプロレタリアート大衆のエネルギーを全幅的に信頼していたからである。そこがミヘルスとは違うところであった。ミヘルスはもっと複雑であり、もっと曖昧であった。

一方で、『政党の社会学』時期のミヘルスはエリート論の時代(中期)とみなされ、エリート論グループの一人に数えられるのだが、他の論者との比較検討は研究上の深化のためにも必要な作業であろう。たしかに、これまでも述べてきたところだが、モスカ、パレトとの違いがもっとも際立つ視点の相違は、大衆の重視である。とりわけ、ミヘルスの場合、対リーダーでの大衆の心理分析にある。モスカとパレトはどちらかといえば、政治階級(支配階級)と統治エリートの権力分析に焦点をあてていた。ミヘルスは自分の経験からも、労働者大衆は決して無視できない存在であると信じていた。それどころか、彼の中心的分析対象をなしていたといっても過言ではない。「大衆の不可欠性」の強調は生涯変わらなかった。<sup>(9)</sup>といっても、大衆を肯定的に評価しているわけではない。その点ではローザとも異なる。そのため、リーダーによる大衆の代表という観念をどうミヘルスは考えていたかが問題となる。

代表と有権者の関係に関しては、様々の視点から研究されてきた。そもそも「代表」の存在は欺瞞以外の何物でもない、不要であるとの主張から、抽象的な人民は優れた代表、それどころか独裁者によってこそ体现されるとの説(ボナパルティズム)まで様々である。近代民主主義にとって中枢をなすテーマであり、繰り返し議論されてきた。<sup>(10)</sup>

政党の場合、代表の問題は複雑な性格をおびる。ミヘルスは主著の中でこう問う。党の国会議員は選挙区の代表なのか、それとも党の代表な

のか、と。前者なら、代議士は党から独立した資格を得ることになる。「党外のリーダー」となる。彼らは、議員に関わる問題では、党大会を省略して、議員間で決定できることを要求する。ミヘルスによると、こういう事態は党の「弱い民主主義」に対応している。党大会（代議員と党員大衆）は、先の理由に基づき、議員フラクションを中心とする執行部に、「盲目的に同調する。」

ローザ・ルクセンブルクは労組と党を比較して、党の方に社会主義精神が具現しているというが、ミヘルスも同じ立場にたつ。「リーダーの支配者性」とオリガーキー傾向は、労組で一層鋭く示されるし、「中央集権主義」も強い。一方の大衆の方はといえば、「金をだし、オリガーキーを支えるだけ」なのだ。

SPD リーダーは、大衆に対して「愛情」は抱いてはいるが、大衆の公的問題への判断力については疑いを持つ。従って、党内でのレフェレンダムには反対する。他方では、国政レベルでは、直接立法を強く要求するのに、である。「党と国政」間での二重基準は、ミヘルスによると党生活のすべてを貫いている。政党の問題の方がより「複雑」なわけがないのに、と彼は批判する。大衆の能力に対するネガティブな評価については、ミヘルスによると、イタリアの社会主義者トゥラーティやドイツの修正主義者ベルンシュタインも同意見である。リーダーがプロレタリアの意見に従うのは当然だ、ただし「何が労働者の利害」かの判定はリーダーが有す、というわけである。

労働者大衆自身の自治が不可能となれば、それを代表するリーダーが必要となる。そのリーダーが支配者に転換するというのがミヘルスの基本的な見立てである。

ところで、「エリート観念と民主制観念との間の和解」、これがボットモアによると、現代民主主義定義の基本的共通性である。<sup>(11)</sup> シュムペーターによって定式化された、こういう現代民主主義観に照らして、ミヘルスの『政党の社会学』解釈に根本的変更が必要になるのではないか。少な

くとも、観点の変更は必要となろう。ミヘルスの民主主義観念を、直接民主主義に寄せて位置づけるかぎり、代表制とエリート支配への批判的視点は、依然として、ミヘルスから見出せる。さらに、エリート論的民主主義は、ミヘルス自身が見出したと考えられるのだが、その場合、組織のオリガーキー傾向は、民主主義との関連で、ミヘルス自身の内部で、どう位置づけられたのだろうか。ミヘルスはそもそも、オリガーキー的民主主義の何を問題視したのだろうか。

オリガーキーの表現として、代表者は「人民への奉仕者から人民の支配者となる」というのがあるが、ミヘルスによると、これは古くから知られている「真実」である。前に述べた、党内と国政レベルでの執行部の判断の二重基準は、この真実についても、皮肉交じりに告発される。党では、政府の権力悪用にだけ断固たる反対がなされるのに、党内で、リーダーによる権力悪用について柔軟になる、と。(S. 149.) もっとも、オリガーキーに対抗する大衆の力をミヘルスは完全に軽視しているわけではない。リーダーと大衆が衝突する場合は、大衆が団結していれば勝つことも可能だし、その例もあったとミヘルスは書いている。(S. 157.) 党員大衆が、「活発に」アクターとして、歴史の舞台に追い出されたときは、「党オリガーキーの権力を廃棄する」との表現は、ローザ・ルクセンブルクを想起させる。1925年版に比べると、初版の方が、革命的サンディカリスト・ミヘルスの名残がまだみられるのも自然だろう。

さて、官僚制はマックス・ウェーバーの理論化と共に、政治学の主要テーマとなったのだが、同時期にミヘルス自身もオリガーキーの形成要素に加えている。ただ、ウェーバーのそれとは異なり、『政党の社会学』では、中央集権的と分権的傾向という視点から分析がなされる。官僚制に関する箇所は、「国家の組織は、……広範に編成された官僚制を必要とする」で始まる。ミヘルスのここでの分析は正統派マルクス主義的で、官僚制を資本主義経済の発展との関連で分析するのを特徴とする。(といっても、以前の論考で幾度かすでに指摘されてはいたが。) すなわち、



資本と労働の強大化に伴って、またそれらに「挟撃」されて、中間層が不安定な地位に追いやられたこと、それに国家の側が、「飼い葉桶」として手を差し伸べたことが、官僚制の形成を促したというのである。ミヘルスはこの官僚たちを、「インテリ・プロレタリア」を名付けた。いわゆる、「教養市民層」の中心的勢力をなすといえよう。<sup>(12)</sup>官僚が「公的良心と反抗への対抗手段」(S. 159.)として、国家防衛に必要となる。中間層の救済装置と組織防衛機能という点で、国家と党内の官僚制は共通であることも追加できよう。

官僚制の成長は社会主義にどう影響するか。ミヘルスはこの問題で、二つの点で有害と断ずる。

まず、党官僚は日常的、専門的業務に専念するあまり、社会主義の理想を否定するにかかる、という。第二に、視野がせまくなり、国際的な視点が後退する。

官僚制は官僚たちを「墮落」させる。依存性と社会のプチブル化をもたらす。これが「プロイセン主義の亡霊」(W. ハイネ)を呼び起こす。ドイツの国民性との共鳴が語られる。ゲルマントゥムはいまだ「死滅」してはない。(S. 165-166.)

ところで、オリガーキーに抵抗すると期待できる、中央集権主義に對抗する分権化についてミヘルスはどう考えていたか。彼は一般的な解釈とは反対の見地に立つ。すなわち、近代労働運動における、分権的傾向は、「成熟した大衆の独立への志向性」から生まれたとする考え方は誤りと断ずるのである。党執行部で分権化を主張するのは、少数派で、彼らは全支部の連邦制を要求する。対して、多数派は、党員の多数派を基盤とする。したがって、執行部への中央集権制によってこそ、「大衆の意思」を妥当せしめることができる。従って、民主的形式といえる、と多数派は主張するというわけである。ミヘルスは地方の組織支部でのボス支配を念頭に置いている。分権化しても、「大きなオリガーキーを……いくつかの小さなオリガーキーに分解させるだけに終わる」、と。

甚だ悲観的な結論となる。

現代の民主主義論は、自由主義（多元主義）を不可欠の構成要素とする。自由主義無しの民主主義（シュミットの民主主義のような）は、トクビルの恐れた「多数者の専制」を招きやすい。自由主義と民主主義は今日、密接不可分の結合体をなす、と考えられる。オリガーキーとの関連でも重大な論点を提起する。すなわち、多元主義はオリガーキーに対抗できる原理ではないか。

ミヘルスは、党内デモクラシーの追及をリーダー間の権力闘争という視点から考察している。もっとも、その前提には、大衆の存在の不可欠性という認識がある。すなわち、「党内デモクラシー」は強力なリーダー無しにはやっていけない。ただ、リーダーは、交替させることが肝心である。ミヘルスの主張は、要約するとこうだ。ここでミヘルスは、ほとんどモスカ、パレトの「エリートの周流」説を踏襲している。大衆はリーダーを生む。「大衆は常に支配には無能力だ」から。しかし、エリートと対抗エリートはそれぞれ大衆の「支持」をとりつけようと、媚びるし譲歩する。しかし、大衆は「手段」であることには変わりはない。彼らエリート（候補者）は、大衆に対しては、自分を「大衆の奴隷」と訴えるが、それは外面だけである。

マックス・ウェーバーは、ルーデンドルフとの対談で民主主義の定義として、リーダーを選出するだけではなく、それを失脚させることとする<sup>(13)</sup>。ニュアンスの違いをさしひいても、ウェーバーはエリート論的民主主義の立場に立つことは明らかである。ミヘルスの叙述はあくまで悲観的であり、リーダーは大衆を操作する、すなわちデマゴグでしかない、との観念が底流にある。大衆への信頼は警戒を要するが、リーダーは常に大衆を裏切る可能性がある。ここにミヘルスのディレンマがある。そして現代の我々は、リーダー間の戦いに民主主義の現実的作用方式を見る。しかしそれで十分だろうか。

ボットモアはエリート間の競争としての民主主義観に二つの視点から

批判する。エリート論的民主主義者は、「人民による政府」という民衆支配に、代表制で対抗する。ミヘルスの場合にも当てはまることだが、技術的に代表制しかありえないとする考えは、直接的民衆支配を民主主義の理想とする立場からは、思想的怠慢に他ならないというのが、第一の批判である。つまり、先の民主主義をエリート間の競争と定義する論者たちは、「立法ならびに行政への民衆の直接参加という理想にてらして代表制政府を位置づけ、この理想にヨリ近づくための手段を探し求めることをせず、代表制政府自体を理想と考える傾向を免れない。」

ミヘルスは代表制政府を理想とはしないが、オリガーキー傾向に対抗する傾向の考察で、それを試みていると言える。もっとも、そのことには、機能不全と逆効果の結果しかもたらない、という結論だが。(S. 141-143)

シュムペーターへの第二の反論はこうである。民主主義は、他の体制と並ぶ一つの政治体制ではなく、19世紀の民主主義は運動として観念されていたこと、すなわち、「貴族と富裕階級」に対する「下層階級」の政治的要求の表明であった。のみならず、19世紀の民主主義観としては普選、複数政党間競争、代表制政府で民主主義は十分という考えではなかった。さらに先へと進む思想であり、運動であったことを、ポットモアは主張する。すなわち、社会（民主）主義への進む運動である、と考えられる。そしてミヘルスはまさにこの社会主義運動とその組織を「生体解剖」の俎上にのせた。

ミヘルスは、党内でのリーダー間の権力闘争について、くどいほど記述している。しかもネガティブな視点から。ミヘルス自身の経験が強く反映していると考えられる。しかし党内の多元主義を党内デモクラシーの本質的構成要素とする考えはみられない。闘争組織としての党の結束と効率的な戦いにとって「思想の自由は意味がない」(S. 188.) とさえ言いきっている。

むしろ党内デモクラシーの構成要因として党外のシンパの存在が重要

と考えていた。つまり、先にもふれたが、党員の議員は党メンバーとしての資格と、投票者集団のどちらを基盤とすべきかという問題である。社会主義シンパの有権者集団のほうが、「小市民と弁護士」そして政治的無関心が強い党員とからなる党組織よりも、「民主的の意味で、よりよい基盤」をなすとして、党員のみが党内デクラシーの主体となるとはミヘルスは考えていない。(S. 189-190.)

「新旧のリーダーが、大衆の支持を求めて互いに闘うというのが民主主義の実相である」とミヘルスは、後のシュムペーターと同様に断言する。しかも、旧体制に反乱して権力の地位についての革命家は革命を裏切る。「党組織の旧いリーダーそれ自身と、システムとしてのリーダー支配に対する反抗は、危険ではない。今日の革命家は明日の反動家なのだ。」(S. 192.) 最後の有名な文句は、オーウェル「動物農場」を先取りする表現といえる。

## 2. 権力論

『政党の社会学』でミヘルスが自著の独創性として自賛している、第三部と第四部は、確かに新境地といえる。「大衆指導がリーダーに及ぼす心理的影響」と「リーダーの社会的分析」がそのテーマであった。

「民主的オリガーキーの発展は、一般的な人間特性によってさらに促進される。組織と管理と戦術の必要性から始まったものが、心理的必要性によって完成される。」(S. 193.) これが当てはまるのは、とりわけ労働者出身のリーダーであるというのがミヘルスの結論である。

しかし、権力が人間を変える、というのは経験知に属する。リーダーの地位についての労働者はその地位に恋々とし強く執着する。それに比べて、かつての社会主義者鎮圧法時代の社会主義者の方が倫理的で優れていたとミヘルスは評価する。そして「勝利と平和の時代」になって、彼らは墮落した、と。(S. 201.)

ウェーバーは指導者民主主義を提唱したが、ミヘルスは同じ問題を

「ボナパルティズム」として考察している。

ビーサムやミッレスによると、ミヘルスの社会主義からファシズムへの転向は、既に『政党の社会学』の中に措定されている。中間的議会制を否定して、リーダーと大衆とを直接に一体化させる方式の問題である。それはボナパルティズムと人民投票をテーマとした箇所からうかがえる。ミヘルスは、ボナパルティズム・イデオロギーを「もともと全体の意見より生まれた、ついでそれが独立し、自ら主人になりおおせた一人の意思の支配の理論」と定義する。従って、ボナパルティズムは民主主義の出自をもつ。「人民が憲法によって認めた独裁、これが人民主権の読み方である。」(S. 203.)

議会に対抗して、人民投票によって権力の地位に就いたこと、「中央権力に蓄えられた人民の意志と言う理論」(S. 206.)、「頂点の権力のみが、大衆の直接的意思に基づいている」という、ミヘルスのボナパルティズム分析と評価は、後のファシズム権力の特徴付けにつながってくる。ナポレオン三世は、人民を議会から解放した、と描かれるが、かくして、全能の人民主権は独裁者として具現化される。人民投票は「すべてを解き放ち、すべての非合法を正当化した。」(S. 207.)

今日代表制は本質的に「みなし」や、「擬制」とされるのが普通である。これにはミヘルスも気づいており、その「みせかけ」機能を指摘している。「民主的に反応する大衆」の下でこそボナパルティズムにチャンスがある。なぜなら、「それは大衆に、自分たちが主人の主人であるという妄想を抱かせるからであり」、この妄想が大衆に好都合な「みせかけ」を与えるからである。リーダーは大衆の「自尊心」に媚びるし、利益も分配する。しかし、民主的なリーダーも実質的には「専制」を行う、とミヘルスは判定する。

このみせかけによる大衆支配は、「党内政治」でも同じであるとされる。(S. 209.) リーダーと大衆の間に、「絶対的服従」関係が成立するのは、「選挙という民主主義的プロセス」による。有権者と選挙が民主的

であればあるほど、リーダーの権力は大きく、従って専制となる、というパラドックス。「絶対的服従」という点では、かつての貴族制と同様で、支配する貴族への反抗は「神」への反抗となるのだが、「オリガーキーの民主主義」の下では、「オリガーキー的命令への反抗は、自己自身への反抗となる。」つまり、人民は絶対王政（授権説）の神と同じ地位を占める。(S. 213.) このことは、民主主義の原理の自己否定を意味している。「民主主義のリーダーシップは、大衆の民主的全能というフィクションの上に築かれる。」党のリーダーは、「全体の利益」を体現する。反抗者は、党規律を侵した「犯罪者」のみならず、「異端者」の烙印をおされる。従って、ミヘルスにおいて「民主的オリガーキー」は民主的ではないということになる。

この「みせかけ」がモスカから着想を得たことは推測に難くない。モスカによると、デモクラシーとは、大衆に自己統治の幻想を与える政治定式（イデオロギー）に他ならない

かくして、党リーダーは絶対的な支配者へと転化し、オリガーキーが完成する。「朕は国家なり」とは有名なルイ14世の言葉だが、その絶対王政に似た党リーダーにとって、「党それは私だ」との表現があてはまる、とミヘルスはいふ。権力の民主的基盤が強ければ強いほど、リーダーの「自尊心」は巨大となる。(S. 217.) ミヘルスによると、党と一体化されることではリーダーと官僚とは同様である。官僚制もオリガーキーに寄与するとミヘルスは考えている。彼らも自己を全体と同一視する、「誇大妄想狂」の心理状態に陥る。

ところで、リンスも指摘するとおり、オリガーキーを形成するのはリーダーか官僚制か、ミヘルスではっきりしない。官僚の「誇大妄想的」自信は、「大衆の要求を大衆自身よりもよく知っている」という自信から生まれる。他方リーダー層は党組織と自己を一体視するので、当然、党の財産も、いわば「家産」化する。その結果、ゼネストによる党財政の危機は彼らの恐れるところとなる。これこそ、「民主的思想」の「抹殺」

以外のなにものでもない、とミヘルスは断ずる。(S. 219.)

### 3. 政治階級と知識人

『政党の社会学』IV部「リーダー層の社会的分析」は、本書の隠れた白眉とでもいえるかも知れない。というのも、そこにはミヘルス自身のSPD体験が具体的に反映しているからである。

ミヘルスはまず階級闘争の一般的分析を、いわば弁証法的小おこなっている。つまり即自的な矛盾対立の存在とその対自化(自覚化)が階級闘争の必要条件なのである。「宿命論が揺り動かされ、自分の被る社会的不正の感情が目覚まされ、先鋭化されない限り、階級の解放運動は生まれない。抑圧的な状況の存在自体ではなく、抑圧された者がそれとそれとして感じ取ることが、階級闘争の歴史の動因をなす。」(S. 221.f.)従ってプロレタリアートの解放闘争には「階級意識」を「夢状態」から覚醒させる必要がある。いわゆる20世紀西欧マルクス主義の旗頭ゲオルク・ルカーチは後に、ヘーゲル哲学の圧倒的影響の下、階級意識論を展開した。その要諦は、労働者の階級意識の覚醒は、労働力商品としての自己意識にあるとして、彼はそれを名著『歴史と階級意識』(1924)において華麗に展開した。

ミヘルスの議論はむしろ社会学的であった。「プロレタリアートの階級意識の覚醒」には、ブルジョア・インテリが必要というのである。まさにイロニー以外のなにものでもないことはミヘルス自身認めるところである。ブルジョアの一部が自階級を裏切りプロレタリアの陣営へと移り、そこでリーダーシップを発揮するというわけである。転向したブルジョア・インテリの使命はプロレタリアートの階級意識の「まどろむ状態」に、「自覚的な方向性」を与えること、「抑圧」と解放との、「世界史的な過程」での意味を自覚させることにある。プロレタリアートの方では、「上」の階級からの「協力」により自信を得る。この過程をミヘルスは、「心理学的な歴史法則」と読んでいる。いわば一階級の反抗が

全人口の反抗へと発展する過程となるというわけである。さらに「プロレタリアートの運動」が「社会主義運動」となるためには、科学が必要とされる。社会主義以前の、従って、マルクス主義以前の反乱は「自然発生的」であったという、当時一般的だった理解が付け加わる。「自然発生的」の表現についてはレーニンとローザ・ルクセンブルグの議論が有名だが、ミヘルスは、むしろレーニンに近い位置にある。もっとも、この時期のミヘルスがレーニンについて何か知っていたかは不明である。本書への引用もない。1925の第二版で初めてレーニンの名が出てくる。

ともあれ近代労働運動にブルジョア出身の理論家と指導者が多いことは「歴史的事実」であるが、ミヘルスはこう自問する。「プロレタリアートへのブルジョアからの多くの転向者の存在は、階級闘争の全理論をだいなしにしないだろうか。」(S. 227.) ミヘルスはイタリア社会主義へのブルジョア転向の代表としてデ・アミーチスをよく取り上げている。転向の心理学的分析は非常に興味深い叙述である。<sup>(14)</sup>

ブルジョアの大群が社会主義へと大挙して流れ込むということ(ミヘルスはこれを「ハラキリの理論」と呼ぶ)には、階級エゴイズムが大きく邪魔する。これは平和革命が無理ということを意味する。しかし、階級闘争では、敵階級を道徳的に弱体化することが重要との説は、俗流マルクス主義と正統派の革命待機説への批判としても興味深い。

政治階級の変容(墮落)問題で、ミヘルスは、パレトの「周流」説(「交替」説)に対して「アマルガム」説を唱えている。つまり、「古い政治階級に新しい血を吸収させて、政治階級の新陳代謝をはかる」というものである。<sup>(15)</sup> このアマルガム説は、体制よりも政党の方によく当てはまるという。そして、労働者政党の場合、それは二つの位相で発現する。ブルの労働者政党への流入と、労働者の党内での出世による階級上昇という問題である。

ブルジョア出身のリーダーについての叙述に際して、ミヘルスが自己の出身階級と青年時代の体験を念頭に置いていることは、想像に難くな



い。彼は、ブルジョア家族の子息が社会主義者へと転向する際の物的、観念的、社会的な「喪失」を具体的に叙述している。ドイツ・ブルジョア層の階級意識が「カースト」のように堅固なことの裏返しといえよう。大ブルジョア、中間層、高級官僚の息子の社会主義転向は「大きなカタストロフ」を招来する。彼（女）は、「パラノイアか悪党」とみなされる。「彼は自分の手で全過去と手を切ることになる。」(S. 238.) (ブル出身の社会主義インテリは、所謂アカデミカー問題として有名なのだが、独立したテーマで後述する。のちにミヘルスは、二つのインテリ論文でそれに触れている。)

インテリの転向については二つの動機を彼は挙げている。学問的営為の結果としての転向と、強い正義感による衝動の二つである。プロレタリアの場合は社会主義は「血の中」(S. 236.)に存するのに対して、ブルジョア出身者は、「巨大な理想主義」に触発される。しかし、とミヘルスは注記しているが、党の巨大化とともに、「ひねくれた理想主義者」(出身階級内で認めてもらえなかった不満分子)も流入し、「墮落の芽」を植え付けるといふ。この、ブルジョア出身の「理想主義者」とプロレタリアの血肉としての「階級エゴイズム」が、いわば、党のダイナミズムの源泉となる。そして、民主主義の自己否定に急進主義が作用したと同様、「理想主義の成功」は、党の「死」を意味するとミヘルスは得意のイロニーを付け加える。すなわち、「労働者政党の民主化」による党の「死」である。これが次のテーマとなる。

党とその組織の巨大化は、「死」の始まりを意味する。修正主義論争とSPDの保守化の組織論的原因探求が、『政党の社会学』の歴史的意義の一つである。(この点はルカーチも『理性の破壊』で認めていた)SPDの保守化は、マックス・ウェーバーも夙に見抜いていたことであり、本書の基本的な部分が彼の示唆を大いに反映していることも確かなようである。ミヘルスは、かつての自らと同様の左派急進主義者であるパルヴスを引き継いで、独特のSPDのブル化の原因を究明している。

「人民の党へのブルジョア層の殺到」とは区別すべき、もうひとつの重要な問題が生じたのである。「政党運動それ自体が生み出した小ブルジョア層」という問題である。(S. 259.) この現象は、軍隊と教会にも同様に見られるという。プロイセンの軍隊組織に入ったブルジョアの息子は、自らの階級を離脱し、「封建化」する。ドイツの教会は、小ブルの子弟と農民にとっては、労働者の優れた子息にとっての労働者政党と同様、「社会的上昇の梯子」の役を果たす。

有能な労働者は、現代産業組織内の上昇を見込めない場合、その代償を「現代の労働運動に見出す。」党の職員層に入ることは、「肉体労働者」から「頭脳労働者」となることを意味する。かってと比べて、「高給」が支給されることによって、彼らは「プロレタリア・エリート」と化す。組織の巨大化は官僚制を生みだし、そのための人員を必要とし、優秀な労働者からリクルートする。「社会的、経済的」変容は、「心理的変容」を引き起こす。一方には、ブルからの転入者、他方には労働運動家（とその子弟）の小ブル化、ミヘルスは「全く悲劇的な運命」と呼んでいる。それは政党のみならず、労組や消費組合などあらゆる解放運動に存するとミヘルスは云う。「政党の病気」(S. 271.) は避けられない。

『政党の社会学』時代のミヘルスは、階級社会観と大衆社会観との間で揺れ動いている。労働者大衆を「巨大で一様な、まとまった灰色の大衆」とみなすことはできないと言いつつ、他方で労働者大衆がまとまった階級の実態をなしているかどうか、疑問を呈している。彼は労働者階級の中の「亀裂」に注目する。熟練と未熟練の労働者、組織された労働者と未組織の労働者（この両者の間で「連帯」は難しいという）、そして外国人労働者排除、等今日でも通用する亀裂の数々を列挙する。こういう労働者階級の分解と「分極化」は「社会主義にとって本質的な危機」をなすことはいままでもない。ミヘルスは、「第四身分の胎内から第五身分がうまれている」と表現する。(S. 284.)

労働者組織内でのプロレタリアの分解は、リーダーの小ブル化という

形で既に触れていた。ミヘルスはリーダーシップ *Führertum* と支配とを区別していないとはしばしば指摘される<sup>(16)</sup>ところである。だが完全に同一視していたかという、必ずしもそうではない。リーダーが支配者に変貌していく「傾向」を分析するというのが彼の研究の真意と考えられる。

まず、労働者の運動にはリーダーが必要というのがミヘルスの基本的前提である。従って、マルクスの労働者の解放は労働者自身の仕事であるという、有名な命題はしばしば「誤解され、矮小化」されてきたという。

リーダーと労働者大衆との「本質的親和性」の可能性をミヘルスは認めている。リーダーが労働者の「経済的必要」を知っている限りでそれは支配にはならない。ここで彼が、かつてのサンディカリスト時代にこだわった、ミラノの排他的な労働者党のことを回顧しながら、労働者出身のリーダーに注目する。「労働者リーダー」は「救い主」のように見える、と。しかし、ここで想起される、労働者の、「媒介者」無しでの自治といっても、結局のところ「ごまかしであり、錯覚である」と悲観的に結論する。「プロレタリア出身リーダーは労働者であることを止める」からである。彼らも、ブル出身リーダーと同様、「オリガーキー傾向」を免れない。労働者出身リーダーに対して、ミヘルスは痛烈な皮肉をあびせる。「社会主義という教義は、彼らにどんな関心を抱かせるか。彼らは既に、社会革命を成し遂げている。根本的に彼らの思想は、無意識のうちに、唯一の希望に集中する。すなわち、彼らが代表し彼らを扶養するプロレタリアがさらに長期にわたって存続すること、これである。」(S. 293.) だから彼らは、自己保身のため、「向う見ずな政策」を思いとどまらせる。改良主義は労働組合リーダーの実存から生起した。従って労働運動につきものの「すべての欠陥」を、「プロの党はブル分子で溢れている」ことに帰せしめるのは、運動史に対する完全な無知によるのだ、とミヘルス主張する。

「知識人の誤りは……自分が人民—国民から区別され分離されていれば……それだけで知識人になりえると……考えることにある。」

「もし知識人と人民—国民，指導者と被指導者の間の関係が有機的参加の結果であり，そこで感情と情熱が知性，そして知識になるならば……その時，そしてその時はじめて，両者の間の関係は代表の関係になる。その時はじめて，支配者と被支配者，指導者と被指導者の間の個々の要素に交替が生じることができる。つまり，両者に共通の生活が実現される。」<sup>(17)</sup>

これは，ファシズムによって投獄されたイタリアのマルクス主義者，グラムシのことばである。ジョルによればこれは，グラムシにおいて，「知識人の役割は，大衆の信念，大衆の感情と，他方では政党の内部における党内民主主義の問題全体に繋がっている」ことを示している。いわゆるグラムシの〈有機的知識人〉のことである。グラムシは知識人の出身階級にはあまり拘泥せず，むしろその機能に注目している。労働者階級自身も自らの階級内から有機的知識人を輩出できると考えていた。

グラムシよりも15年年長のミヘルスは，社会主義運動と知識人との関係をどう考えていたか。

青年ミヘルスが属していたSPDでは，カウツキーらは，社会主義運動における労働者とインテリ<sup>(18)</sup>の関係を，形式的，機械的に捉えていた。すなわち，（ブルジョア出身の）インテリは，労働者大衆に，理論とイデオロギーを提供し，教示する役割を担うとされた。

ミヘルスも，基本的にはその傾向に従って考えている。ただ自己の体験の反省から，問題はそう単純には考えられない。先ず「社会主義者が犯罪者とか狂人と刻印を押された」時代（カウツキー），ブル出身者が社会主義へと転向するには多大なエネルギーを要する。「ブルジョア，とりわけ社会的に上層の諸階級出身の社会主義者は，内的にも外的にも厳しい戦い，苦難の昼と眠れない夜を通して社会主義へとたどり着いたのだが，そのことが，確信を固め，エネルギーと情熱を生みだした。そ

れらはプロレタリア出身の同志には稀なことである。彼はブルジョア世界と繋がれた橋をすべてぶち壊した。ブルジョア世界にとって彼は仇敵となり、ア・プリオリに和解不能となる。彼はブルジョアとの闘いで容易にラディカルな方向へとひきつられていく。」(S. 305., cf S. 231. ff.)  
これは社会主義インテリが過激になる背景であり、「アカデミカーにはラディカルが多い」ということになる。(S. 307.) イタリアでの事例が逆のケースとして、それを実証している。イタリアでは「ブルジョアから社会主義への道は平坦である。」よって、イタリアの脱ブルジョア社会主義者には修正主義者が多い、と見る (S. 309.) 先のグラムシの理想論との関連で言うと、転向社会主義者と「大衆」との間には寛容が存在する。

対してドイツでは、転向に際して支払った「犠牲」について大衆はほとんど理解しない。「インテリとプロレタリアは互い理解しなかった。」  
こういった大衆の心情に基づいた、もっともな、反アカデミカーには、良い面もあるが、倫理的には「不当」で、不適切だとミヘルスは批判する。労働運動にインテリは必要なのだ。プロレタリア性が圧倒的な SPD でさえ、「そこから学識者を追い出すとしたら、党は精神的にも政治的にも重力を失うことになる」といっても言い過ぎではないと断じた。プロレタリアには「技術的」にも「物質的にも」、**「社会主義的ブルジョア」**が必要不可欠なのだ。ここにも、一種のアマルガム現象がみられよう。それはまさに「運動自体の統合要因なのだ。脱ブルジョアのいない政治運動は、その運動を担う階級意識のあるプロレタリアのいないものと同様、歴史的には不可能なのだ。」(S. 319.)

約20年後、ミヘルスはアメリカで発刊された「社会科学エンサイクロペディア」に「インテリ論」を書いて<sup>(19)</sup>いる。『政党の社会学』との比較は興味を引く。ここでもインテリの反体制的、批判的スタンスの本有性が(留保つきながら)言われる。自由を生命線とするインテリは、権力に批判的たらざるを得ないからである。そしてミヘルスの持論、「階級

意識」論もくりかえされる。フランス啓蒙哲学者たちは、旧勢力の「大義の善への自信を掘り崩すことにより、彼らの政治的抵抗力を著しく弱めることで、フランス革命に貢献した。」もっとも、「インテリが潜在的に革命的性格を持つ」という命題には留保がつけられる。反革命運動にも、ナショナリズム、反セム運動にもインテリは参加したからである。

社会主義運動の登場とともに様相が一変する。というのも、運動の本質的部分に主知主義が据え置かれたからである。「実践的運動にたいする主知主義の最大の貢献はマルクス主義である。」マルクス思想によって、労働運動に普遍的な文化運動の倫理的側面を装備させることで、「労働運動は主知主義化した。」それはおもにインテリの仕事だった。

「知識人」論文は、革命的サンディカリズムとインテリに関する叙述をも含んでいる。これが興味深いのは、20世紀になってフランスでインテリの「自己批判」が始まったというからである。ミヘルスはここで、ソレル、ラガルデル、バルトによる、労働者主義 *ouvriérisme* の立場からのインテリ批判を紹介している。結局インテリは「役立たず」なのだ。ミヘルスが革命的サンディカリズムから遠く離れてしまったかのように見えるが、それは間違いである。同じころ彼は、青年ミヘルス＝サンディカリストの自画像を描いているからである。<sup>(20)</sup>

## お わ り に

最後にインテリとしてのミヘルス自身の活動について一言しておこう。

労働運動はインテリを必要とするが、彼らの特権化がオリガーキー成立の一要因となった、というのがミヘルスの基本的考えであった。

さて、社会主義運動におけるユダヤ人の比重が高いことは広く知られている。自国で迫害と差別を受けた青年ユダヤ人たちは、外国で勉強を強いられる。これが「国際主義」のイデオロギーの地盤になった、と。この叙述が面白いのは、同じことが、脱ブルジョアした青年ミヘルスにも当てはまるからである。インテリのコスモポリタン性は夙にマンハイ

ムが『イデオロギーとユートピア』述べていたところであるが、ミヘルス思想と知的活動についても、その視点から再考察してみる必要があろう。

そもそもミヘルス家の家系ははじめから国際性に富み、ミヘルス本人の教育も多国にわたっていた。いわば生まれつきの国際人だったといえる。ミヘルス家の「コスモポリタンの背景」については、ミレスが要領よくまとめている。それによると、ミヘルス家には、祖父母以来、ドイツ、フランス、ベルギー、イタリアの血縁関係がある。さらに、宗教的にも、カトリック、プロテスタント双方が混じっている。<sup>(21)</sup>

また成人後の知的活動について、したがってその思想形成についても同様のことが言えよう。たとえば、1908年に「アルヒーフ」に発表された「社会のオリガーキー傾向——民主主義問題に寄せて」論文などは、モスカ、パレトのドイツ語圏への最初の紹介とみることができるからである。後のファシスト・ミヘルスがムッソリーニとファシズムのプロパガンダに努力し、イタリア紹介やファシズム研究を数多く出版したのも、その活動の国際性の表れともいえる。この視点は今後のミヘルス思想の再評価のうえで参考になろう。

## 注

- (1) 翻訳『政党の社会学』イタリア語版(1912)への序文、氏家伸一訳、『神戸学院法学』第47巻第1号2017、65頁。
- (2) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie. Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens*. 1911. 本稿の対象は、『政党の社会学』ドイツ語版第一版(1911)である。ミヘルスの思想的発展をたどるのが本研究の目的であり、初版を重視するからである。頁は本文中の括弧内の数字で表記する。イタリア語版(1912)やドイツ語版第二版(1925)については、必要ある範囲で参照する。
- (3) Einleitung von Harald Bluhm/ Shadi Krause, in *Robert Michels' Soziologie des Parteiwesens. Oligarchien und Eliten—die Kehrseiten moderner Demokratie*, S. 10.f.
- (4) Rolf Ebinghausen, *Die Krise der Parteiendemokratie und die Parteiensoziologie—Eine Studie über Moisei Ostrogorski, Robert Michels und die*

*neuere Entwicklung der Parteienforschung*, 1969, S. 15.

- (5) デモクラシーにおける「代表の独立性」に関しては後述の小川論文参照。
- (6) このあたりについては、野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社学術文庫, 1997, 95頁, 101頁参照。
- (7) Parvus, *Der Gewerkschaft und die Sozialdemokratie. Kritischer Bericht über die Lage und die Aufgaben der deutschen Arbeiterbewegung*, S. 58-S. 66. 不思議なことに、1925年の独語第二版ではバルヴスからの引用はなされていない。
- (8) ローザ・ルクセンブルク (河野信子・谷川雁訳)「大衆ストライキ・党および労働組合」『ローザ・ルクセンブルク選集 2』現代思潮社, 1969。
- (9) cf. Robert Michels, *Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen, Grundriss der Sozialökonomik*, Abt. IX, Teil I, 1925.
- (10) 小川晃一の以下の論文が有益だった。「政治的代表的論理」『北大法学論集』第37巻1号, 1986。「政治的代表的論理 (一)」第38巻5-6号, 1988。「政治的代表的論理 (二)」第39巻3号, 1988. 小川論文の依拠したハンナ・ビトキン『代表の概念』が最近邦訳された。
- (11) T. B. ボットモア (綿貫譲治訳)『エリートと社会』, 岩波, 1965, 40頁。
- (12) 前掲の野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』参照。
- (13) マリアンネ・ウェーバー (大久保和郎訳)『マックス・ウェーバー』II, みすず書房, 1972, 488頁。
- (14) デ・アミーチスと社会主義の関係については次を参照。「ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (4) エドモンド・デ・アミチス」『神戸学院法学』第15巻3号1985。
- (15) 「政治階級とインテリ」については、(*Nuovi cenni sulla classe politica ed intellettuale*, *Economia Italiana*, anno XVIII, N. 11, 1932, pag. 589-90. を参照)
- (16) Rainer Paris, “Herrschen, Führen und das Problem der Delegation”, in, *Robert Michels’ Soziologie des Parteiwesens. Ologarchien und Eliten — die Kehrseiten moderner Demokratie*, S. 218. またサルトーリは Führertum を leadership と英訳すると原義のニュアンスが失われると指摘している。G. Sartori, *Democratic Theory*, 1973, p. 339.
- (17) J. ジョル (河合秀和訳)『グラムシ』岩波現代叢書1978, 139-140頁。
- (18) *Antonio Gramsci — Selections from Prison Notebooks*, edited and translated by Quintin Hoare and Geoffrey Nowell Smith, p. 3, Introduction
- (19) “Intellectuals”, in *Encyclopedia of the Social Sciences*, 1931.
- (20) 参照, ロベルト・ミヘルス (氏家伸一訳), 『ドイツ社会主義における



サンディカリズム的底流（1903-1907）』、『神戸学院法学』第23巻第4号，1993。

- (21) Joachim Milles, “Brüche und Kontinuitäten eines radikalen Intellektuellen. Zur Einführung in die Politische Soziologie Robert Michels”, in, *Robert Michels – Masse, Führer, Intellektuelle Politisch-soziologische Aufsätze 1906-1933.*, 1987, S. 8-9.
- (22) Die oligarchischen Tendenzen der Gesellschaft. Ein Beitrag zum Demokratie. In *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Band XXVII, Heft I, 1908, S. 73-135.